慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「人間学者」フリードリヒ・シラー：『視霊者』と経験心理学
Sub Title	Ein Anthropologe Friedrich Schiller : Der Geisterseher und Erfahrungsseelenkunde
Author	厚見, 浩平(Atsumi, Kōhei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.110, (2016. 6) ,p.217 (54)- 227 (44)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	冊子には前からの通しページあり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01100001-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「人間学者」フリードリヒ・シラー
――『視霊者』と経験心理学

厚見　浩平

はじめに

『視霊者 Der Geisterseher』(1787 – 89)[1]は、ドイツの劇作家・詩人フリードリヒ・シラー Friedrich Schiller (1759 – 1805) の手になる数少ない散文作品の一つで、自身が主宰する雑誌「タリーア Thalia」の第4巻から第8巻にかけて連載された[2]。第一部まで完成したものの、その末尾に予告された第二部が以後執筆されることはなく、未完のまま残されている。この理由として、作者本人が『視霊者』に対し終始冷ややかな態度をとっていたことは無視できないだろう。読者の要求に応えるかたちで渋々第一部の続きを執筆していたシラーは、友人ケルナーに宛てた1789年3月17日付の手紙で『視霊者』を「三文小説」と呼び、この「ひどい時間の浪費」に対する不満を述べている[3]。

このような未完の、しかも作者の評価も低い作品が研究対象とされるにあたっては従来、いわゆる「恐怖小説 Schauerroman」のジャンルに与えた影響の大きさが注目されてきたように思われる。例えば、亀井伸治は特にドイツで隆盛を見せたその一分野、「秘密結社小説 Geheimbundroman」の実質的嚆矢として『視霊者』を挙げ、多くの模倣を生んだ同作を「ドイツの〈恐怖小説〉の発展にとっての最重要作品のひとつである」[4]と高く評価している。その影響の大きさはまた、E. T. A. ホフマン (1776 – 1822) の小説『世襲領 Das Majorat』(1816) で、展開上重要な役割を与えられていることからもうかがい知れよう[5]。

このようなセンセーションを巻き起こした理由として、ペーター＝アンドレ・アルトは「心理学の症例研究と冒険小説、陰謀渦巻く物語が技巧的に組み合わ

されている」[6]点を指摘し、『視霊者』を「経験心理学の精神に基づく小説」[7]と総括している。アルトの見解に従えば、「経験心理学」の知見を取り入れたいわば「心理学小説」として読むことで、「恐怖小説」ないし「秘密結社小説」とは異なる『視霊者』の新たな一面が明らかになるはずだ。その際には、「経験心理学」が、精神・身体の総合体として人間を把握しようとする「人間学Anthropologie」[8]の一手法であったことにも目を向ける必要があるだろう。実際、ユルゲン・バルクホフは、『視霊者』の主人公であるフォン・** 公子の性格や気質が、典型的な「メランコリー気質者 Melancholiker」のそれを反映しているという「人間学」的解釈を提示している[9]。

本論ではそれを踏まえ、まず「経験心理学」研究の成果が『視霊者』のバックボーンをなしていることを、シラー本人や同時代の「人間学」的著作と対照させて具体的に検証する。その上で、人間身体・心理に対し強い関心を持ったシラーの「心理学者」ないし「人間学者」としての側面を明らかにしていきたい。

1. 「医師 シラー」と心理学

シラーは劇作家・詩人であると同時に、カール学校において医学を修めた「医師」でもあった。卒業論文「人間の動物的自然の精神的自然との関係に関する試論 Versuch über den Zusammenhang der thierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen」（以下、「試論」と略記）では、人間の心身を「動物的自然」と「精神的自然」に区分し、そのそれぞれの相互作用を論じている。2012年刊行されたベルント・ヴェルナーの研究書[10]はこの「試論」を中心に、カール学校時代以降におけるシラーの医学的著作に焦点を当てたものである。『視霊者』の分析に移る前に、これを援用しつつ「試論」におけるシラーの問題意識を整理しておこう。

論文は、「序論」、「A. 身体的連関 Physischer Zusammenhang」、「B. 哲学的連関 Philosophischer Zusammenhang」の3章に大きく分かれている[11]。A.で取り上げられるのは、身体の精神への影響、つまり相互作用の生理学的側面である。

シラーによれば、人間身体は「魂への作用Seelenwirkungen」、「栄養摂取 Ernährung」、「生殖 Zeugung」の３つの機構から構成され、栄養摂取と生殖に関する機構は文字通り、身体の維持と人類の存続に関する身体のメカニズムを指す[12]。シラーは生成と破壊を物体（身体）の宿命と見ていたが、この際、種々の

有機的な力の生産によって損なわれた構成を補おうとする機構が「栄養摂取」である。しかし、この生成と破壊の相互補完運動は不完全なものであって、破壊された構造がそれ以前と全く同様に回復することはない。こうして徐々に物体は損なわれ続け、その結果人間はやがて死を迎えるとされる。「生殖機構」は、このように死すべき定めにある人類に与えられた、種を維持するシステムである。

一方、魂への作用機構についてシラーは次のように説明している。物体（身体）の活動は魂（精神）のそれと連関し、外界の変化が「中間的有機力 mittlere［r］organische［r］Kräfte」を通じて精神に伝えられ、ある観念が生み出されると、さらにこの変化は今度、意志の運動を媒介して外部へ伝えられる[13]。つまり、ここでは思考と感覚の処理に精神の運動が深く関わっていると考えられている。

ところで、情動を含めた身体的欲望は精神が生み出すものではないので、理性はそれらを弱められこそすれ、完全に消し去ることはできない。これに関してシラーは卑近な例を挙げて、説明を行っている。すなわち、明晰な観念を有する人物 ── 例えば数学者や物理学者、哲学者など ── はたしかに、不明瞭な観念を有する人物より身体的欲望を批判的にとらえ、それに耐える能力に長けているが、きわめて高い徳やきわめて深い哲学、宗教によっても魂がその桎梏から完全に自由になることはない[14]。だから、精神には動物的自然による感覚の影響を最小限にする役割が期待される。動物的自然はこのように魂の性質を決定する点で精神的自然の基礎であり、その影響こそ「両自然の関係における第一の要素である」[15]。

「B. 哲学的連関」に関する議論の出発点もやはり、精神にとっての身体の役割に置かれる。シラーはここで、心身相互の影響が存在しないという仮定が成立しないことは「事実 Fakta によって確かめられる」[16]として、経験的事実に即した議論を展開する。

例えば、身体がないとき精神は想像力と意志によって観念を生み出すことはできるが、感覚を備えていないので、その思考は内にとどまり何か外界のものへ作用を及ぼすことができない[17]。しかし、これは我々の知る「事実」に反する。シラーはその状態を「外部からの刺激がない機械」[18]に例え、精神にとっての感覚の重要性を強調する。

同様にシラーは、個人の成長・発展も両者の相互関係と関連づけて考えてい

た。彼によればそれは、「あらゆる精神の能力が動物的衝動から展開する」[19]プロセスであるという。子どもには、空腹やのどの渇きといった単純な衝動が優位である。それが少年になると、「精神の力を、感覚の安寧をもたらすように用いるすべを学ぶ」[20]ようになる。しかし、この精神のはたらきはまだ、目的のための単なる手段に過ぎない。年を重ね、青年・大人になると、「精神的美の輝き」の価値に目覚め、精神の満足という全き尊厳を完全に理解するようになる[21]。この段階に至って初めて、精神のはたらきは手段ではなく目的となるとされる。

2. 『視霊者』における人間操縦術(マニプラツィオーン)[22]

『視霊者』においては、上述のような心理学的知見がいわば悪用される。それは、公子を籠絡しようとする「アルメニア人」において、はっきりとうかがえる。彼はイエズス会と思しき秘密結社に属するエージェントであり、プロテスタントからカトリックへの改宗を目的に、公子の心理に揺さぶりをかけていく。彼が任務を遂行するにあたり、特に心理学を巧みに利用していると思われるのは次の三点である。すなわち、第一にフォン・** 公子という人物をターゲットに選んだこと、第二に物語の語り手であり、旧知のフォン・O** 伯爵らとの接触を断たせ、公子をヴェネツィア社交界に独り身を置かせたこと、第三に第一巻で行われる降霊術や、第二巻で言及される特定のバイアスがかかった書物の濫読を通じて、公子の未熟な理性を混乱させたこと、である。以下では『視霊者』の筋と対照させながら、これら3つの手法を検討していきたい。

2-1 公子の性格と教育

物語の冒頭部で、主人公たる公子の性格は以下のように描写される。

> 彼は歓楽を避け、35という年になりながら、この官能的な町のあらゆる誘惑に耐えていた。女性にもそれまでは無関心だった。[…] 空想の世界に閉じこもっていたから、現実の世界では往々にしてよそ者であった。弱いわけではなかったが、彼ほど心を支配されやすい人はいなかった。[23]

このような性格が形成された原因として槍玉に挙げられるのは、公子が受けた不

健全な教育である。語り手は第一部で「なおざりな教育と早期の軍役のため、彼の精神 Geist は成熟するに至らなかった」[24]と述べ、第二部で「この教育が、終生完全に払いのけることのできなかった恐るべき像を柔らかな脳に刻み込んだ」[25]とも補足する。この教育がもたらした強力な影響に関しては、公子自らも認めるところである。

> ［…］だが、教育と幼い頃の習慣が植えつけ、お前たちの中の何百何千の痴れ者たちがますますしっかりと地固めをした誤った考えを、すべて記憶から追い出すことができようか。[26]

「試論」に従えば、少年期をとうに過ぎた公子は「精神の力を、感覚の安寧をもたらすように用いるすべを学」び、精神は身体と正しい関係を取り結んで、前者が後者の欲望を適切に牽制・制御するはずである。しかし、「なおざりな教育」によって不明晰な観念しか持ちえない公子は、秘密結社の人間操縦術（マニプラツィオーン）のなすがままになってしまう。

2-2 秘密結社の陰謀 (1) ── 過度の交際

さらに、身の丈に合わない「楽しみの多い生き方」[27]が、公子の内面におけるネガティヴな側面を助長する。先の引用にもあったが、もともと公子はヴェネツィアの町でつつましやかな生活を送っていた。しかし、自らの身分が人々の知られるところとなり[28]、上流社会の面々との交際を強いられるようになる。人間学研究の泰斗、ハンス＝ユルゲン・シングスが「情動の治療を目的とする性格学的人間学」[29]の例として挙げる『人間交際術 Über den Umgang mit Menschen』(1788) で、著者クニッゲ (1752 – 1796) は、他人との交際にばかりかまけ自らを疎かにする過ちを戒めている。

> 常に気晴らし Zerstreuung の中で生きている人間は、自分の心にとってのよそ者となる。［…］自分に対する自信を失い、ひとたび自分と顔を突き合わせる段になると当惑してしまうのだ。そのように耳に快いことを言ってくれる仲間だけを求める人間は、真実の声に対するセンスを失い、しまいには、自分の内部からの真実の声にすら耳を傾けなくなる。それでもなお、良心が

なにか不愉快なことを囁くと、善意の声がかき消される雑踏のなかへ逃げ込んでしまうのだ。[30]

公子は秘密結社の陰謀によって、まさしく「常に気晴らしのなかで生き」、「自分の内部からの真実の声にすら耳を傾けなくなる」状態に陥ってしまう。刹那的な享楽に身を委ねることを諌められ、公子は以下のように言い放つ。

――あの官能の渦の中などに逃れたのが、私の生活を不幸たらしめる内なる声を麻痺させるためだとしたら ―― 鋭い鎌のように脳中を駆け巡り、新たな探索をするごとに、わが幸せという新しい枝を一本一本切り捨ててゆく疑り深い理性を眠らせるためであったとしたらどうだ。[31]

しかし、「疑り深い」はずの彼の理性は実のところ「真実と誤謬をなお、あまり明確に区別しない[32]」脆弱なものにすぎず、いたずらな懐疑を弄んで疑心暗鬼を生ずるに至る。こうして、秘密結社の策略通りに事は運んでいく。

2-3 秘密結社の陰謀 (2) ――読書

自らの理性に対する信頼を誤った方向に深める原因として、読書を見逃すことはできない。上流階級との交際に後れを取るまい、と公子は読書に精を出し、最新の知識・情報を吸収しようとする。しかし、悪いことに彼が手に取る本は、予め秘密結社の篩にかけられたものであった。もとより読書は「手あたり次第であった」[32]公子だが、第一巻で「シチリア人」による降霊術のトリックを論理的な推理によって鮮やかに暴き、自らの理性の能力を過信したままおよそ1年もの間「悪しき手」[34]によって選ばれた書物に触れるうち、最終的に無神論者となってしまう。これこそ、秘密結社の狙いとするところであった[35]。そもそも、「シチリア人」は「アルメニア人」の手下であった。つまり、杜撰な降霊術は改宗に向けたプログラムの一環であり、公子の理詰めによる種明かしも、そのプロセスとして織り込み済みだったのである。

無神論に傾倒し、精神的支柱を失った公子は放蕩で気を紛らわし始め、最後には「アルメニア人」らが差し向けた女性エージェント、「女ギリシア人」の虜となるに至る。「女性にもそれまでは無関心であった」公子の面影は、もはや形無

しである。

2-4 秘密結社の陰謀と心理学

ここでもう一度「試論」に立ち戻って、「アルメニア人」らが公子に仕掛ける手法を考察してみよう。

「試論」の主眼は、人間を「獣と天使の不幸な中間体」[36]とみなし、特にこれまで往々にして蔑ろにされてきた身体の重要性に光を当て、身体と精神がどのような関係を取り結んでいるか、という問題 ── いわゆる「心身問題」── を論じた点にある。身体重視の姿勢は、タイトルからもうかがい知れる。「精神的自然の動物的自然との関係」ではなく、「動物的自然の精神的自然との関係」とあることに注目しよう。これは、身体の精神に与える影響が中心的話題である、という宣言に他ならない。実際、「試論」の序文でシラーは、肉体を過度に貶める立場（プラトン等）と肉体のみを肯定する立場（エピクロス等）を共に極端であると批判したうえで、後者に歩み寄る。

> しかし、精神の力が身体に依存していることを度外視し、多くの事柄が精神の力のせいばかりに帰され、後者［身体］は蔑ろにして記述されてきたことで［肉体のみを肯定する］より多くの誤謬が犯されたので、この試論では精神の活動に対する身体の括目すべき寄与、つまり、動物的感覚システムが精神的システムに与える偉大かつ真なる影響へ明晰なる光を当てることに、より多く努めたい。[37]

『視霊者』における身体的欲望の肯定も、このような文脈でとらえられるべきであろう。語り手が、「たくましい体と潑溂たる健康によって一層力強く爆発した少年時代と青年時代の欲求も、すべて宗教に邪魔をされた」[38]と言うとき、非難されているのは抑圧的な宗教教育であって、欲求を生み出す「体」ではない。「試論」によれば、身体抜きの精神というものは考えられず、種々の感覚がそれに対応した理性の反応を引き出す点で、精神は身体に規定されているとも言える。してみれば、公子が「アルメニア人」らに籠絡される展開は、身体を蔑ろにする神学的価値観への批判であると同時に、いわば理性の検閲機能に対する懸念の表明でもある。既に見たように、感覚に起因する観念が或る行為を結果すると

考えるならば、「誤った」入力に対しては、「誤った」出力がなされることもありうる。改宗プログラムの一環として行われる「読書」は、それを悪用したいわば「負の人間学」の一例であろう。もとよりなおざりな教育と、その上に築かれた危うい知識のため、「自身の力によってその生を統御しうる資質を持たない」[39]非自律的な人間である公子は、「悪しき手」が恣意的に選んだ書物による生の規範の混乱で拠り所を失い、その結果極端な懐疑論に走ってしまう。何も信頼できなくなった彼は、失った心の安定を埋め合わせようと他者との交際に耽り、クニッゲの警告通りかえって不安を募らせる。最終的に、これに耐えきれない脆弱な理性には、「無秩序で変化し続ける世界への不安と単純な因果律への回帰の志向から、従来の枠組みと構造的に類比した代替物への依存欲求が起こって来る」[40]のである。

3. 結び

以上見てきたように、「試論」を中心に18世紀後半の「心理学」ないし「人間学」と対照させると、『視霊者』には、それらの成果が効果的に取り入れられていることがわかる。一見敬虔で堅物な公子が性格上・教育上の弱みに付け込まれ、「過度の交際」や「読書」等、「アルメニア人」らの「心のメカニズムに基づいて作られた精密なプログラム」[41]に嵌って破滅するまでを整合性をもって描くにあたっては、心理学的知識が少なからぬ貢献を果たしている。未完の『視霊者』を補筆する試み[42]が不首尾に終わった原因の一端には、各々の著者における心理学への造詣の差があったに違いない。

『視霊者』以外のシラー作品に、心理学・人間学の影響を見るのも容易い。アルトがいみじくも指摘している通り、『群盗』のフランツ・モーアは『視霊者』の「アルメニア人」を彷彿とさせるキャラクターである。

己の欲望を満たすため彼は兄カールをはじめ、その婚約者アマーリエ、そして自分の父すらもその毒牙にかける。「完全犯罪を遂行するために近代医学の知識を悪用する」彼の手口は「アルメニア人」のそれと類似しており、その意味で両者は「精神的兄弟」と言える[43]。

また、第4幕第2場で平静心を失ったフランツは半ば錯乱しながら以下の科白を吐く。

乳母や世話係たちの、われわれの想像力 Phantasie をぞっとするようなお伽話で腐らせ、処刑のおぞましいイメージをわれわれの柔らかな脳髄に刻み付け、さらに無意識の恐怖で人間の四肢を凍り付くような不安のうちに震わせ、われわれの勇気ある決断を妨げ、覚醒している理性を迷信の闇という鎖に縛り付けてしまう愚かさに呪いあれ。[44]

「恐怖を呼び起す像を柔らかな頭に刻み込んだ」と述べるフォン・O** 伯爵の語りは、フランツのことばをそのままなぞっているかのような印象すら与える。

さらに、シングスは『ヴァレンシュタイン Wallenstein』(1800) 中の登場人物であるイロを「メランコリー気質者」の例に挙げている[45]。同様に、心理学的知識に裏打ちされなければ、シラーのバラードにおける緊密な構成もありえなかった[46]。初期作品に限らず、シラー作品の通奏低音として心理学は欠くべからざるものでありつづけたのである。

その意味でシラーは劇作家・詩人であると同時に、一貫して「心理学者」であり、「人間学者」であったと言えよう。

註

1 シラーの著作からの引用は、以下の版を使用した。
Schillers Werke. Nationalausgabe. Begründet von Julius Petersen, fortgeführt von Lieselotte Blumenthal und Benno von Wiese, hrsg. [seit 1991]von Norbert Oellers, Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar 1943 ff.
以後、引用の際はNA と略記し、巻数と頁数を併記する。なお、『視霊者』のドイツ語翻訳にあたっては、石川實 訳『招霊妖術師』（国書刊行会、1980年）を適宜参照した。

2 Schiller Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. Hrsg. von Matthias Luserke-Jaqui, Verlag J. B. Metzler, Stuttgart / Weimar 2005, S. 311-315.

3 NA 25, 30.

4 亀井伸治『ドイツのゴシック小説』（彩流社、2009年）12頁

5 パンチ酒に酔った語り手、テオドールが『視霊者』の降霊術の場面を読んだ後、滞在中の城に幽霊が現れる。亀井、前掲書、277-288 頁; E.T.A. Hoffmann: Nacht Stücke.

Text und Kommentar. Hrsg. von Hartmut Steinecke, Deutsche Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 2009, S. 207.

6 Peter-André Alt: Schiller. Eine Biographie. Band 1. Verlag C. H Beck, München 2000, S. 571.

7 Ebd., S. 578. 経験心理学に相当するドイツ語は、Erfahrungsseelenkunde である。経験心理学と「人間学」、文学との関係については、例えば以下を参照のこと。 Vgl. Hans-Jürgen Schings: Melancholie und Aufklärung. Melancholiker und ihre Kritiker in Erfahrungsseelenkunde und Literatur des 18. Jahrhunderts. Verlag J. B. Metzler, Stuttgart 1977, S. 28 ff.

8 「人間学」の概略については、例えば以下を参照のこと。Vgl. Alexander Košenina: Literarische Anthropologie. Die Neuentdeckungen des Menschen. Akademie Verlag, Berlin 2008, S. 9 – 17.

9 Jürgen Barkhoff: "The echo of the question, as if it had merely resounded in a tomb": The Dark Anthropology of the *Schauerroman* in Schiller's *Der Geisterseher*. In: Popular Revenants. The German Gothic and Its International Reception, 1800-2000. Edited by Andrew Cusack and Barry Murnane, Camden House, NY 2012, p. 44 – 59.

10 Bernd Werner: Der Arzt Friedrich Schiller oder Wie die Medizin den Dichter formte. Verlag Königshausen &Neumann, Würzburg 2012.

11 NA 20, 39.

12 NA 20, 41 f.

13 Ebd.

14 NA 20, 46 f.

15 NA 20, 48.

16 NA 20, 49.

17 Werner, S. 144; NA 20, 49 f.

18 NA 20, 50.

19 Ebd.

20 Werner, S. 145.

21 NA 20, 51.

22 石川實によれば、「人間操縦術」に対応する manipulation ということばは本来メスメリズム用語に由来し、「催眠状態に陥れた人を制御することを意味する」。石川實『シラーの幽霊劇』（国書刊行会、1981年）210頁　参照

23 NA 16, 46.

24 Ebd.

25 NA 16, 103.

26 NA 16, 123.

27 NA 16, 105. 原語はzerstreuungsvollで、文字通りには「気晴らし（Zerstreuung）が

多い（voll）」という意味である。クニッゲの引用にもある、「気晴らし」という表現に注目されたい。

28 北原博はこの理由を、秘密結社が王子の身分を吹聴して回ったためと考察している。北原博『ゲーテの秘密結社 ――啓蒙と秘教の世紀を読む――』（大阪公立大学共同出版会、2005年）51頁 参照。

29 Schings, S. 27 f.

30 Adolph Freiherr von Knigge: Über den Umgang mit Menschen. Insel Verlag, Frankfurt am Main 1977, S. 82. 翻訳にあたっては、笠原賢介・中直一 訳『人間交際術』（講談社、1993年）161-162 頁を適宜参照した。

31 NA 16, 123.

32 NA 16, 104.

33 NA 16, 46.

34 NA 16, 105.

35 イエズス会はまず対象者を無神論者に貶め、その上でカトリックに改宗させるとの噂が18世紀当時流布していた。Vgl. NA 16, 449.

36 NA 20, 47.

37 NA 20, 40 f. [　] 内は筆者の補足。

38 NA 16, 103.

39 亀井、前掲書、234 – 235頁

40 同上、235頁

41 石川（1981）、208頁

42 例えば、1796年から97年にかけて出版された、フリードリヒ・エルンスト・フォレニウス(1773 – 1809)による「続編」が知られる。亀井、前掲書、216 – 217頁

43 Alt, S. 585.

44 NA 3, 95.

45 Schings, S. 44.

46 シラーのバラードの技巧については例えば、坂田正治『バラードの競演　ゲーテ対シラー』（九州大学出版会、2007年）を参照。